

Title	ヒルデ・リゴーディアス=ヴァイス フランスにおける労働者調査(一八三〇年-一八四八年)
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.2 (1954. 2) ,p.193(85)- 194(86)
JaLC DOI	10.14991/001.19540201-0085
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540201-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

發展に對し阻止的な役割を果した企業家の性格の第一のものとして、フランスの企業家が、新しいもの、未知なるものを極端に嫌う保守的な人々であつたという點を強調している。安全こそフランスの企業家の最大の關心であり、成功のためには、おそくとも安全でなければならぬと考へるのであつた。フランスの企業家にとつては、このように、安全が第一であつたから、安全な市場として、外國との競争から完全に遮断された國內市場を、フランスの企業家は欲した。現に、フランスの産業は、法外に高い關稅によつて保護されていた。そして、このことが、フランスにおいては、企業を維持するための基礎となつたのであつた。企業家は、政府を一種の父と看做し、その腕のなかに保護と掩護とを求めようとしたのである。この根本的に子供っぽい態度に、當時の企業家の特徴の一つがあるのである。

第二の特色としては、フランスの企業家が、資金面において、他人資本の流用を極力避けた點にある。企業は、フランスにおいては、資本的に完全に獨立してゐた。擴張のための費用は、普通、利益が再投資されるか、もしくは親戚や友人から調達されるのであつた。このことは、逆に、新人の資金調達を、非常に困難なものたらしめた。唯一の財産が頭腦であり、獨創力であつた新人の進出は、フランスにおいては不可能に近く、資本は在來の企業と結びつくことによつて、新規の發足を阻止しようとしたのであつた。

基本的な企業家の單位は、とにかく、このように、家族であり、この家族は、より大きい全體の一部であつて、その性格が、フランス社會の傳統により規制されることは、申すまでもない。企業家が、フランス社會において、いかなる地位を持つていたのか、又企業家が、フランスという社會において、どんな眼をもつて見られていたのかといつたようなことが、フランスの企業家の性格を規定する要素として、重大な意味を持つて來るように思われる。

端的にいつて、フランスにおいては、企業家は、常に、非常に低い位置にあつた。企業家は、社會の最下位にあつたといつても決して過言ではなかつた。フランスの地主は、企業家を敬遠し、企業家のなかに、破壊的な要素のあることを指摘した。成り上り者の絶え間ない欲望に對して、地主は、出生の名譽を誇つた。貨幣の威力に對して、地主は、土地の強い安定を誇つた。しかも企業家が、地主階級のかかる名譽の誇示によつて幻惑されたといふことは、企業家が、フランスにおいては、最下位に位置していただけに、特に甚だしかつた。この點は、企業家が、いかなる手段によつても、地主階級の一員たらんとした事情から明白である。企業家は、土地を最も安全な投資場所と考へ、社會的地位を獲得するための基礎と思つて、企業に對する投資よりも土地に對する投資に、より積極的になつたのであつた。企業家は、フランスにおいて傳統的に尊ばれていた農業への進出によつて、守銭奴とのしられ、利己主義者と呼ば

つまり、フランスの企業家は、企業的發展に對して積極的ではなかつたのである。むしろ積極的たり得なかつた。保守的な點といひ、知人や親戚から資金の融通を受けていたため、かえつて大きなことができなかった點といひ、又資金の融通が縁故者に限られ、新人はかえりみられなかつた點といひ、とにかくフランスには、反資本主義的と名づけられることのできるような雰囲気、一般的であつた。生産は、使用のためであつて、利益のためではないという中世的な考へ方が、フランスにおいては、依然として、その妥當性を失なつていなかつたといつても過言ではないくらいであつたのである。

では、産業革命時代におけるフランスの企業家を、かかる性格の持主としてつくり上げる上に、影響した諸要因は何か。フランス社會の構造が、産業革命下のフランスの企業家の性格を、規定することは疑いないが、ランデス氏は、本論文において別の角度から、この問題を掘下げようとしてゐる。

そのような條件の第一のものとして、ランデス氏は、フランスの企業家が、家族的基礎の上に組織され、企業家が、その企業を、生産のための機構とも、富を無限にするための手段とも考へず、家族の地位を維持し確保するためのものとして考へていた點を指摘するのである。いかなる場合においても、企業は、それ自體目的ではなく、目的に達するための手段であつた。そして、フランスにおいては、富の維持に對しても、富の創造に對してと同じ程度の關心が拂われていたのであつた。

れた現在の境遇から、一刻も早く抜け出せよう願つていた。企業家として成功しても、これに對し何らの敬意も拂われなかつたという正にこの事情が、企業家を企業から離し、遂には工業發展を中斷するという恐るべき結果を惹き起してしまつたのであつた。

(渡邊國廣)

ヒルデ・リゴードイアス・ツァイス

『フランスにおける労働者調査

(一八三〇年—一八四八年)』

(Hilde Rigaudias-Weiss, "Les Enquêtes

Ouvrières en France entre 1830 et 1848,"

Paris, Librairie Felix Alcan, 1936 pp. xi

+ 262.)

第十九世紀に入つてフランスは産業革命を経験した。しかしフランスにおいて産業革命が本格化したのは一八三〇年以降であり、七月王朝に次いで出現した二月王朝下のことに屬した。正にこの時期にフランスにおいては資本家階級の勢力が急速に擡頭して來た。同時に工場労働者の數も著しく増加したが、その生活はさぶる悲惨なものであつた。労働者はその地位の向上を目指して資本家に對抗して團結し、階級對立が新しい社會不安の原因となつた程であつた。

しかも一部の急進論者が労働階級の不滿を煽つたことはいふ

までもない。「資本家だけが法律の制定に當つてゐること、資本家のように、市民の法律をつくる以外に、我々は不幸のきずなから最後まで逃れ得ないことを忘れるな……」。我々は自分等の不幸なことを知つていて、……團結もせず、運動もしない」「やがて烈しい騒動が労働者の中から起るだろう……」。或る者は突然の職の取上げを、又或る者は賃銀の切下げを歎いた……。皆が機械の恐るべき威力を呪つた……。「労働者が苦しくて騒いでゐるのに、資本家は勝利に酔つてゐる」。このような警句に刺戟されて、事實労働階級はいかなる手段に訴えても自己の立場を主張しようとした。そして早くも一八三四年にはリヨンの絹織工の大暴動があり、又その他の織物都市においても待遇改善を請つて労働者の動きが活潑になりつゝあつたのである。

かかる事態に對して二月王朝は無關心であつた。むしろ慈善家・經濟學者が労働者問題について非常な關心を寄せ、二月王朝下における工場労働者の實態を詳細に傳へる調査報告書をいくつか残してゐる。すなわち、Aperçu sur la condition des classes ouvrières et critique de l'ouvrage de M. Buret, Paris, 1844. Blanqui, "Des classes ouvrières en France pendant l'année 1848. Paris, 1848. Buret "De la misère des classes laborieuses en Angleterre et en France. Paris, 1840, 2 vols. Ducpétiaux, "De la condition physique et morale des jeunes ouvriers et

des moyens de l'améliorer." Bruxelles, 1843, 2 vols. Kahan-Rabecq "Les réponses harrises (Le Havre) à l'Enquête de l'Assemblée Nationale. La Révolution de 1848." 1884. Villeneuve-Bargemont, "Economie politique chrétienne." Paris, 1834, 3 vols. Villermé, "Tableau de l'état physique et moral des ouvriers employés dans les manufactures de coton, de laine et de soie," Paris 1840, 2 vols. 等であるが、なかでもヴィレルメとビュールの報告書が重要であつた。

リゴーディアス・ヴィニス女史も亦本書においてこの二つの報告書を取上げて詳細な説明を加えてゐる。女史は、ヴィレルメの報告書が児童雇傭を制限する法律の制定に役立つた點、又労働者の住宅問題について世論を喚起した點にその重大な影響を認めはするが、しかし女史によれば、ヴィレルメはあくまでも保守主義者であつたのであり、労働者の不幸を終始その不行為に歸してゐたことがその何よりの證據だといふのである。むしろ女史は、ビュールのなかに進歩的な要素を求めた。現にビュールは、貧困の原因を富の分配と労働の組織とに結びつけて考へてゐる。又貧困を解消するためには世界的な規模の闘争が必要であると強調した點、女史によれば、ビュールは正にマルクスの先驅者であつたのである。

(渡邊國廣)

經濟學關係文献目錄

(昭和二十八年八月—十月)

- 理論 (學說史・經濟思想)**
- * 景氣變動論 波多野鼎著 B 6 二二八頁 二三〇圓 ダイヤモンド社
 - * 劍橋學派及び北歐學派の經濟變動理論 青山秀夫著 二三二頁 A 5 三五〇圓 創元社
 - * 經濟進歩の諸條件 上 クラーク著 大川一司他譯稿 A 5 二九六頁 五六〇圓 勁草書房
 - * 經濟學入門 (創元文庫) ジイド著 泉俊雄・塚谷晃弘譯 A 6 一三四頁 六〇圓 創元社
 - * 平和と戦争の經濟學 オートン著 堀江忠男譯 B 6 二二四頁 二五〇圓 新評論社
 - * 經濟原論 宮田喜代藏著 A 5 三三八頁 四三〇圓 同文館
 - * 經濟觀測 (文庫クセジュ) ソーヴィー著 松岡孝兒譯 B 6 小 一四四頁 一二〇圓 白水社
 - * 經濟學原理 (全訂) 高田保馬著 A 5 三九五頁 四〇〇圓 日本評論新社
 - * 經濟研究者の數學解析 上 アレン著 高木秀玄譯 B 6 三五二頁 四五〇圓 有斐閣
 - * ジョーソンの經濟學 (一橋大學經濟研究叢書) 著 A 5 二七一頁 三二〇圓 大野精三郎 岩波書店

經濟學關係文献目錄

- * 恐慌論 宇野弘藏著 A 5 二二八頁 四〇〇圓 岩波書店
- * サムエルソン經濟學講義 下 川田壽著 A 5 二七四頁 三五〇圓 三和書房
- * 經濟政策原理 稻葉四郎著 A 5 二八六頁 三五〇圓 三和書房
- * 日本平和經濟の理論 日本労働組合總評議會編 B 6 一七五頁 一六〇圓 青木書店
- 統計・數學**
- * 統計學入門 佐藤輝實著 A 5 二二六頁 二七〇圓 評論社
- * 經濟研究者のための統計學 アレン著 大石泰彦・大澤豐譯 二五二頁 三〇〇圓 東洋經濟新報社
- * 日本農業の統計的分析 近藤康男編 A 5 三一九頁 五五〇圓 東洋經濟新報社
- * 經濟統計入門 有澤廣巳著 B 6 二九二頁 二八〇圓 ダイヤモンド社
- 財政・金融 (保險・證券)**
- * 財政學通論 中川與之助 A 5 一五七頁 二〇〇圓 法律文化社

八七 (一九五)